

# いのちの水

二〇二〇年

一月号

七〇七号

私たちの戦いは、血肉を相手にするものでなく、…  
悪の霊を相手にするものである。  
(新約聖書 エペソ書6の12より)

## 目次

- ・私は万物を新しくする
- ・主の愛のまなざし 2
- ・苦難からの神の導き
- ― 詩篇77篇 5
- ・広きところへ 8
- ・お知らせ
- 春季四国聖書集会について9



私は万物を新しくする

この言葉は、聖書の最後に置かれた書にある。

(黙示録21の5)

この世界は次第に古びていく。人間も植物や動物たちもそして地球や太陽さえも古びていく。万物は古びていく、ということを多くのひとたちは信じている。

人間関係、家族や職場、こうした信仰の集いにあっても 古びていく。

そのような万物はふるびていく―と見えるただなかに私たちは置かれて

いるゆえに、この神の言葉は驚くべきものがある。

しかし、ごく身近なところから、新しくされる道は開かれている。

心貧しきもの―自分がいかに真実や愛から離れているか、そのことを深く知っている心にこそ、天の国、神の国が与えられる。

神の国とは愛と真実な神の永遠の支配のはたらいているところであり、それゆえに永遠に古びることとはなく、絶えず新しい。心貧しくあるのなら、神の国が与えられる、と

いうことは、常に新しくされるということである。

悲しみにくれる者は、暗くなる。混沌としてくる、空虚な状態となることとがしばしばである。

しかし、そこから神をもとめ、神の国をもとめるときには、神の慰めが与えられる。

「ああ、幸いだ。悲しむ者たちは、

なぜならその人たちは、(神によって) 慰められ、励まされるからである」

(マタイ5の4より)

悲しみは心を暗くするが、そこに神の慰め励ましがあることとで明るくなる。

「新しくする」ということは、聖書全体を貫いている。全くの闇と空虚なる、混沌とした世界は古びた状態の究極的な状態といえよう。

その中に、神からの風は吹いて絶えず新たなものを吹き込んでいる。

さらに、神は光あれ！との言葉によって、その暗黒と空しさのただなかに光を与えた。

その風と光こそは、神からのものであり、すべてを新しくする根源であった。

神の言葉によって光は地上に到来した。

神の光は神の言葉と密接につながっている。

アブラハムは、ふつうの羊飼いであったが、神の言葉によってそれまでの生涯を一新することが生じた。

彼は全く新しくされた。それは神の言葉の力による。

光があれば、すべては新

しくなる。

私たちの心の深いところに、光が射してくるとき、新しくなる。

そしてそのような光は、命の光である。神の言葉が与えられるときには私たちは新しくされる。

キリストの12弟子たちも、イエスのことば、イエスの呼びかけによって新しくされた。

日々新しくされるためには、日々神の言葉を聞いていかねばならない。

自然の姿から光を受け、ことばをうけるためには、やはり、目を覚ましていなければならぬ。

目を覚ましているとは、神の言葉を聞くこととする姿勢であり、また神の光を魂にうけようとすることである。

神は愛である。愛とは

つねに新しくするものである。悲しみは心を暗くさせ、それは魂を古びたもの、命なきものとする。しかし、神は愛ゆえに、悲しみという古びさせるものを励まし、力を与えて新らしくする。

神の愛は、人間の根源を新しくする力を持つている。その愛は、敵対するものにも祈りを注ぎ出す。

真実な祈りは、相手の魂が神の力によって新しくされるようにとの願いである。そしてこのことは、万物を新しくする全能の神の力のごくわずかを受けてはじめてそのような祈りが可能となっていく。

主の愛のまなざし

神の愛のまなざしを受けたい、誰しもこうした願いを持っていることであろう。この世の人間のさまざまの冷たい目、差別や見下す目、あるいは非難や無視するような目に出会って、傷つき、心の病になっていく人たちは、はかり知れない。

神は人をどのように見ておられるのか、主のまなざしがどのようなものであるか、それは、すでに創世記の最初から暗示され、さらに、アダムとエバに関する記述から、さらにも示されている。

神は全くの空虚、荒涼とした世界、まったくの闇と混沌のただなかに「光

あれ！」との言葉によつて光をもたらした。

それは使徒パウロが言っているように、人間の心の闇の中にも光を与えることである。

「やみの中に、光あれ！」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光がはつきりとわかるようにするために、わたしたちの心を照して下さった。(Ⅱコリント 4の6より)

キリストの顔に輝く神の栄光の知識とは何を意味するのか、キリストの顔には、神の栄光、すなわちあらゆる良きもの―真実や愛、力、清いこと―等々がある。そしてその御顔の中心は目にあり、キリストのまなざしには一切の良きものが含まれ

ている。

それが、神の光あれ！との御言葉によつて、人の心にもわかるように導かれた。そのことは、キリストの愛も実感することであり、主の愛のまなざしもわかるようになることである。

「光あれ！」という聖書巻頭に記された言葉、それは、人間に主のまなざしがわかるようにすることをも含むのである。神からの光なかったら、私たちは神のことも神の愛も、したがって主のまなざしもまったく分からないうままであった。

また、アダムとエバの息子のカインは兄弟アベルを突然襲いかかって撃ち殺した。そのような悪

事をはたらいた人間は、普通なら即座に裁きを受けるであろう。しかし、神は驚くべきことにそのようなカインに対して次のように言われた。

：今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となつてしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺してしまうだろう。

主はカインに言われた。「いや、カインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受ける。」主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けた。(創世記4章より)

赦しがたいような大罪を犯したカインは、当然裁きを受けた。その裁きとは、心身の平安を失い、さすらう存在となることだった。それでも滅ぼすことはされなく、かえって彼を殺されることから守り、ずっと見守るようになった。

このように主のまなざしは、決して甘やかすだけでなく、裁きも確実に与える。しかしそこから罪を犯した者の回復を待ち望むまなざしなのである。

エジプトにおいて長い間、奴隷状態でこきつかわれ、滅ぼされようとしているときに、神はその長い期間の苦しみをもずっと見ておられた。にもかかわらず何ゆえにそのよ

うな長期にわたって苦しみを与え続けたのだろうか。

それはわからない。しかし、それは長い苦しみを通して特別な神の民としての鍛練という意味がこめられていたことはいか

がえる。  
世界のあらゆる民族において、この宇宙に唯一の神ーしかも愛と真実の神がおられるということを示された民は、そのことを世界の民に証ししていくという特別な使命を与えられていた。

そのような重い責任に耐えるにはよほどの苦しみを通っていく必要があったと考えられる。

しかし、それでも神はと

き至ってそこから人々を助け出された。主のまな

ざしとは、愛と真実であつても、私たち人間の感覚からはどうしても理解できないようなことがいろいろとある。

しかし、それでもそのよ

うな苦難もまた、神の愛から出てきたことだと信じていることが求められている。

そして時至って神はモーセという人物をエジプトの民に送った。

それによって民はエジプトから出発し、安楽な生活が待っていたのではなく、荒野の厳しい生活であつた。

水も食物もなく、生きるか死ぬかのぎりぎりのようなところを40年という長期にわたって、旅していくことになった。

しかも、じっさいエジプトから最短距離を行けば、そのような恐るべき砂漠地域を通らずとも、短期間で行ける距離であつた。

それはじっさいイエスが誕生したとき、マリアとヨセフが生まれたばかりのイエスをともしして、エジプトまで旅したほどであつた。そのような道を行けば、はるかに簡単な旅であつたはずである。

しかし、神はそれとは比較にならない困難な砂漠地帯を行き、目的地にちかづいてもなお、オアシス地域で長い年月を費やし、エジプトを出発してから、40年という歳月を費やして目的地に入る道

を導いたのだつた。

その間、火の柱、雲の柱をもつて主がさきだつて導いたという。それは主

のまなざしがずっと存在しつづけたということであらわしている。

そしてこのことは、そのまま現代においても、私たちを見つめる主のまなざしを指し示すことになっている。

朝焼けの美しい空の色合い、さまざまの色彩をもつた雲ー大空を飛び翔る鳥たち、それらは神の愛によつて創造され、いまでも神によつて支えられている。

(\*) それゆえにそうした自然のさまざまの姿は、主の愛のまなざしを反映している。

(\*) キリストは、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであつて、万物を御自分の力ある言葉によつて支えておられる。

(ヘブル書1の3より)

人間においても、深い精神性のある人は、深いまなざしを持っている。

荒れた心、闇に苦しむ心、あるいは浅薄な心、自分中心の心は、目は心の鏡と言われるように、それぞれにその心の世界を目に表している。

神は全能であり、完全な愛や真実、清らかさを持っているゆえに、神は無限の意味を込めたまなざしを持っている。

私たちが主への真実な愛をもって神を見つめるとき、神もまた愛のまなざしをもって見つめてくださる。真剣に祈れば、神様の祈りの心が伝わってくる。

神は愛なりーそれゆえに、

主は愛のまなざしをもって常に私たちを見つめてくださっている。

愛の神がおられるのか、この世のさまざまな災害や荒廃、国々の争い、テロ等々などを見てみると、愛の神などいないという考えに傾くであろう。そのことは、科学や哲学、

その他の学問、人間の思想などによっても分からない。もしそれらでわかるようになるのなら、信じることは不要である。

それらいかなるものによっても分からないからこそ、信じることの重要性がある。万事よきことは、信じることから始まる。

主の愛のまなざしが太陽のように私たちに注がれているということも、信じることから始まる。

### 苦難からの神の導き

#### ー詩篇第77編

神に向かって私は声をあげ助けを求めて叫ぶ。

神に向かって私は声をあげ神は私に耳を傾けて下さる。

#### (2節)

この詩ははっきり二つの内容に分かれている。

11節までを見ると、この詩を作った状況というのは追い詰められた状態にあることが分かる。生きる過程において、どう考

えても祈っても助けがもたないと思われることがあるわけで、これは個人の悩みという問題と共に、歴史の中で見ても迫害の時代は長く、日本においても今のようになつたの

のをいえるようになった

のは、ほんの75年ほどに過ぎない。

それまでの歴史を見ると、支配者に反対してキリスト教信仰を持つなどと告白するだけでも、たちまち逮捕され、そのために牢獄にいれられ、処刑されるという状況であった。

今の日本では、信仰のことで、キリスト教のことなどは自由にいえるし、あるいは首相や天皇に関わる制度のことを批判してもなんともない。

このような状況は、長い歴史のなかでは、ごく最近のことにはすぎない。

他の様々な国の人たちも、何千年もこの詩篇の冒頭にあるような叫びを共にしてきた。

現代はそんな時代ではないから、私たちには関係

ないということではなく、

重い病気にかかれば、た

ちまちこのような主に向っ

て叫ばざるを得ないとい

う状況となるのであつて、

この詩篇の叫びは、作ら

れてから数千年経てもな

お、なまなましいものと

して感じさせる内容であ

いことを知らされる。  
 …苦難の襲うとき、  
 私は主を求めぬ。  
 夜、私の手は疲れも知ら  
 ず差し出され  
 私の魂は慰めを受け入れ  
 ない。(3)

神を思い続けて呻き  
 私の霊は悩んでなえてし  
 まう。

あなたは私のまぶたをつ  
 かんでいる。  
 心は騒ぐが私は語らない

(5)  
 いにしえの日々を私は思う

とこしえに続く年月を。(6)

夜、私の歌を心に思い続け

私の霊は悩んで問いかける。

(8)

「主はとこしえに突き放し

再び喜び迎えてはくださら

ないのか。

主の慈しみは永遠に失われ

たのであろうか。

約束は代々に断たれてしまっ

たのであろうか。(9)

神は憐れみを忘れ 怒つて、

同情を閉ざされたのである

うか。」

私は言う。  
 「いと高き神の右の御手は

変わり

私は弱くされてしまった。」

(11)

3節に、夜、私の手は疲

れも知らず差し出されと

あるが、これは必死に助

けを求めているというこ

とである。

そして、目が開かれたま

ま、閉じさせてくれない

ということ、眠ること

もできず、安らぐことが

できないということ、をさ

している。そして、疲れ  
 果ててもものも言えなくなっ  
 た。

夜に歌を思い続ける―、

神を賛美する歌を少しで

も思い起こすことで、苦

しみから逃れたいという

心があらわされている。

しかしその悩みは去るこ

とがない。永遠や代々

(よよ)に という言葉が

何度もあることから分か

るように、自分には苦し

みを味わう前のような状

態はもう来ないのかとい

う思いになるほど苦しみ

が続くときには、生きて

いけなくなる。

神を信じ、あくまで神に

助けを求め続けることが

できない場合は、この苦

しみはずっと続く。そこ

には死ということにつな

がる思いが生じ、自ら命

私たちは通常の生活のな  
 かでさまざまの願い、祈  
 りがあるが、繰り返し叫  
 ぶというほどの真剣な祈  
 りはなかなかできていな

を絶つということになっ  
ていくことがある。

そして前半の最後に、神  
様を見る目が変わってし  
まった。神の右手は変わっ  
た

―神のいやしの力は私に  
は与えられず、打ち捨て  
られてしまうのだとさえ  
思うようになった。この  
叫びがさらに深まるとき、  
詩篇22篇の冒頭にある  
ように、「わが神、わが  
神、なぜ私を捨てたのか！」  
という絶望的な叫びとな  
る。

キリストも十字架上でこ  
の同じ叫びをあげたのだっ  
た。

現在でも、このような叫  
びが様々なところあるの  
が推察される。

この詩の作者は、いかに  
してこのような恐ろしい

状況から脱出できたのか。

この苦しみからどのくら  
いの日々が経ったかは分  
からないが、12節から  
は大きく変わっていった  
ことが分かる。

：私は主の御業を思い続  
け

いにしえに、あなた(神)  
のなさった奇跡を思い続  
け

あなたの働きをひとつひ  
とつ口ずさみながら  
あなたの御業を思いめぐ  
らす。

神よ、あなたの聖なる道  
を思えば

あなたのようにすぐれた  
神はあるだろうか。(14)

あなたは奇跡を行われる神  
諸国の民の中に御力を示さ  
れた。  
大水は神を見て、恐れ

深淵はおののいた。(17)

雨雲は水を注ぎ 雲は声を  
あげた。  
神の矢は飛び交い (18)  
その雷鳴は車のとどろきの  
よう。

稲妻は世界を照らし出し  
地はおののき、震えた。(19)

あなたの道は海の中にあり  
通る道は大水の中にある。  
踏み行かれる跡を知る者は  
ない。

あなたは、モーセとアロン  
の手を通して  
羊の群れのようにご自分の  
民を導かれた。(21)

どんなに光がなく、八  
方塞がりであっても、そ  
のときが来たら神様は全  
く違うところにおいてく  
ださる。信仰の世界は不  
連続的である。突然にし

て思いがけない救いの道  
が開かれることがある。

私自身も小さいながらも  
そうした経験をしたこと  
がある。

自分のことだけを思っ  
ていたら苦しみばかりであ  
る。その自分から離れて、  
苦しい中からでも主のな  
されてきた御業を思い巡  
らせていた。

それによって、数千年と  
いう長い歴史の流れのな  
かで、神は無数の人を助  
けてこられたことがまざ  
まざと浮んできた。

自分から離れたときに、  
心が楽になるということ  
は普段でも小さなことに  
おいても経験されること  
である。

この詩の作者は、今まで  
私のことばかりを考えて  
いたが、大きく神の御業

をみることにへと方向転換をした。そうすると神の力がまざまざと見えてきたというのが17節以降である。

大水とはこの世の力である。得体の知れない深淵ですら、神を見て驚いたと記されているほどに神の力がひとたび発揮されるといかなるものも太刀打ちできない。

18節は勝利の声をあげるということである。そういうものが聞こえきた。今までは悪の力が自分に襲いかかってきて、おののいていたが、ひとたび神の力の前にはすべて恐れおののいていると全く逆になり、悪の力がおののいていると霊的に分かるようになった。

神の世界を知らされることは、悪の力に勝利することを知らされることにつな

がる。それは私たちの日常生活においてとりわけ重要なことである。最終的に悪の力が善の力を砕き、滅ぼしてしまふのなら、この世に生きていくことは無意味になる。

神は海―すべてを呑み込んでいまいような力に直面してもそこにも道を開き、ご自分の民を導いていく。

この数千年前に作られた詩は、現代の私たちにも、直面するさまざまな闇にもかかわらず、たとえいかにその闇や苦難が大きくとも、最終的には、神の愛とその全能によつて導いてくださるといふ確信へとうながしている。

広いところへ

新しくされるとは、広いところに導かれることである。狭いところとは、暗く、苦しく、悲しいところ、人間関係でも圧迫され、差別される場所である。そこから光があり、感謝や喜びのある世界、祈りのある世界とは広きところ。

聖書には、私たちを広きところへと導かれ、新しくされるのが約束されている。

広いところは、自由であり、つばさを与えられることであり、いのちの水を自由に飲めるところ、また、聖なる風をうけるところである。

この世は狭く暗い、しか

し、神によつて導き出されるとき、そこは広いところである。

○主はわたしを広い所に連れ出し、わたしを喜ばれるがゆえに、わたしを助けられました。詩篇 31 の 18

○わたしを敵の手にわたさず、

わたしの足を広い所に立たせられたからです。詩篇 18 の 19

○人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。われらは火の中、水の中を通つた。

しかしあなたはわれらを広い所に導き出された詩篇 66 の 12



○わたしが悩みのなかから主を呼ぶと、

主は答えて、わたしを広い所に置かれた。詩篇 118の5

お知らせ

春季四国聖書集会

キリスト教独立伝道会と徳島聖書キリスト集会との共催で行なわれます。

・期日：2020年5月

・テーマ：「祈り・感謝・

賛美―主の導き」

・期日：2020年5月

9日(土) 13時〜10日

(日) 16時

・会場：ホテル サンシャイン 徳島 電話088-635-

5252

(徳島駅から歩いて10分

以内です)

内容

・聖書からのメッセージ  
：秀村弦一郎(福岡聖書研究会代表)、西澤正文(静岡県清水聖書集会代表)、

小舘美彦(春風学寮長)、吉村孝雄(徳島聖書キリスト集会代表)。

それぞれ25分程度の短い時間ですが、テーマに関する御言葉からのメッセージがなされます。

・北田康広夫妻によるピアノと賛美の歌(一時間)

・証し：大内信一(福島、農業) 永井信子(東京、いずみの森聖書集会代表)、小舘知子(東京) 那須佳

子(大阪、高槻聖書キリ

スト集会代表)、宮田咲子(大阪狭山聖書集会代表)

・賛美の時間  
、楽器による演奏、県内外の参加者有志による賛美の歌やコーラス、地元徳島集会の人たちによる手話讚美などによって主を賛美する時間です。

これらは壇上での一部の人の歌や演奏を聞くだけでおわるのではなく、それらの演奏や歌を会場の参加者全体も歌うというかたちで、全員参加型の賛美の時間です。

・メール emuna@ace.ocn.ne.jp

★前月号でも書いておきました、宿泊は東京での無教会全国集会のように、各自で申し込むことになっていきます。

これは、従来から行なわれてきた四国集会や徳島での全国集会とはことなりますのでご注意ください。

○参加申込は、左記の吉

村孝雄まで。

・電話 080-6284-3712

または 0885-32-3017 (FAXも)

・メール emuna@ace.ocn.ne.jp

・参加費

両日参加(9日夕食、10日昼の弁当代金含む)

7千円

・食事なしの場合、1日

の参加料金 千五百円、二日間では三千元。

これらの会費は、「いのちの水」誌奥付の郵便振替番号を使って申込時にお送り下さい。

(\*) 証しについて

キリスト教の最初の伝道は、イエスは復活した、という単純な証しであり、弟子たちのうち代表的とされたペテロ、ヨハネ、ヤコブたちはいづれも漁師でした。彼らは学問もなく、文字も読めなかったのではないとも言われます。

しかし、「イエスの復活の証人だ」という使命を与えられ、命がけでその証しを続け、さらにその人たちに

続く証し人が次々と主から

呼び出されて証しを続け、

キリストの福音は驚くべき

速さで広大なローマ帝国に

伝わっていったのでした。

またパウロは、キリスト教

徒を迫害し殺すことまでし

たのですが、その迫害の

さなかに突然復活したキリ

ストからの光と呼びかけを

受けて、回心しキリストの

復活と十字架の福音を伝え

る使徒となったのでした。

そのはつきりした復活のキ

リストの証言を使徒言行録

でも繰り返し語っています。

このように、主が復活され

たというじつさいの出来事

を体験したことでその事実

を語るとい証し、そして

主が何をしてくださったか、

ということを語る証しこそ

は、そこに聖霊がはたらい

てキリストの復活と十字架

の福音が伝わっていく根源

となったのです。

それゆえに今回の春季四国

聖書集会も、自分が何をし

てきたか、でなく、主が何

をしてくださったか、とい

う主の証しの時間を重視し

ています。



訂正

12月号2頁 最後

参加者貫かれる一刺し貫かれる

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47

徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分

(二) 夕拝 第一、三火曜夜七時30分

から。 毎月第四火曜日の夕拝は

移動夕拝で場所が変わります。(場所

は、徳島市国府町のいのちのさと作業所、

板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町

の熊井宅)です。

☆その他、第二水曜日午後一時からの

集会が集会場にて。また家庭集会は、

板野郡北島町の戸川宅(毎月第二、第

四月曜日午後一時より。第二水曜日

夜七時三十分より)、海部郡海陽町の

讚美堂・数度宅 第二火曜日午前十時よ

り)、徳島市国府町(毎月第一水曜日

午後七時三十分より「いのちのさと」

作業所)、第二金曜日の午後8時から

徳島市応神町の天宝堂(網野宅)、徳

島市庄町の鈴木ハリ治療院では第一月

曜日の午前0時からなどで行われてい

ます。

問い合わせは左記の吉村まで

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七二-0115 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 080-6284-3712 固定電話 (FAX兼用) 0885-32-3017

「いのちの水」は自由協力費です。郵便振替口座 〇一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または2000円以内の未使用の切手なら古いものでも結構です。 E-mail: emuna@ace.ocn.ne.jp http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集会」で検索)